

チェルノブイル事故後の ソ連原子力政策はどう変わったか

日本原子力産業会議

森 一久専務理事に聞く

これまでも原子力関係で、ソ連と交流を深めていた日本原子力産業会議（原産会議）は、昨年十一月下旬、ソ連原子力発電省の招きをうけて「ソ連原子力安全調査団」を派遣した。

原産会議の森一久専務理事が同行したが、チェルノブイル事故後のソ連の原子力事情はどうなっているのか。特に、昨今のソ連事情についてはベレストロイカの進捗とともに、情報の乱れもみられる。今回の見聞をもとに、ソ連の原子力政策はどう変わったのか——を中心に伺った。

六回もソ連へ行かれたそうですが、このたび行かれて、チェルノブイル事故以降、ガラッと変わったという印象は——

森 これまでの原産会議とのセミナーでも、聞いて答えられませんかというのではなく、原子力については比較的開放的でした。しかし全体的には情報公開はまだまだ、これからでしょう。人民の生活とか、不衛生さ、汚さとか、ホテルのドアが開まらないとか、

洗面所のタブが無くなっていることなどは、この十五年間、全然、変わっていません。しかし、あの国は人工衛星でも、軍事でもアメリカと競うぐらいの力があります。ということは、ソ連は政策的に重点を置いているところは、質的にも、量的にも一流のことが出来るんです。今度、原子力発電をそこへ置き直した。

——つまり原子力政策が変化したわけ——

森 今、ソ連全体が軍事と平和利用を切り離して、軍事をなるべく小さく、平和利用を重点的に進めて行くように、科学技術政策全体の再構築を始めている。原子力もその一つとして重点的にやろうとしているようです。とにかくソ連は原子力ぬきにはエネルギー政策は考えられません。ヨーロッパ地域からシベリアまで連系して一体化しているソ連の送電系統の要所要所に、大体、四百万KW単位の原子力発電所がある。それがおかしくなったら、電力系統が全部くるってしまう。非常に寒い国だから、停電になったらたいへん。ふとんをかぶって寝ているわけにはいかないから、日本とは真剣さが全然違う。——それで、安全性の問題も見直した——

森 今までは、原子力発電も火力、水力発電と同じように考えて、現にあの事故を起こした発電所の所長が「原子力発電所なんて、サモワール（紅茶わかし）みたいなもの。火力より楽だ」と言っていたが、ところが「そうじゃないんだ。安全性は大変重要だ」ということに置き直したら、今までより優秀な人が入ってくるようになったし、待遇もよくなったという話もありました。

——チェルノブイル事故後、安全性向上のために体制を整え直したといわれますが——

森 そのために五つの組織が作られました。全ソの原子力発電所の運転を一元的に扱う原子力発電省、全ソの原子力発電所をチェックする国家原子力安全監察局、チェルノブイルから三十キロ圏を一元的に管理しているコンビナート、全ソ放射線医学センター、全ソ原子力発電所運転研究所とか。これらにはほとんど「全ソ」がついている。それだけ力を結集してやろうという体制に置きかえた。今度は本気でやるようになった感じがです。しかも現地に行くほど意欲があつて、上からの要求でなく、自分たちの創意で防火訓練をやるとか、安全装置を改良するとか、安全性の向上に大変積極的な姿勢で臨んでいるので安心もしました。

——原子炉の開発路線を代えたとか——

森 今後はチェルノブイル型（RBMK型）は、あるものは改良して使うけれども、手をつけかけたものも全部やめる。軽水炉（VER II 百万KWの標準型の加圧水炉）中心の開発路線に切り換えることは何度かはつきり言っていました。地震についても、建築の基準も満足になかったのが、日本並みの耐震基準を作ろうとしているようです。原子力発電省のラフシン次官が、近く来日しますが、耐震と緊急時の二つについてセミナーをやろうといっています。



森 一久氏

国際協力で急いで自国の安全を高めようという意欲は、大変なものです。

規則違反と人為的事故だということで、特に発電所運転研究所が出来た。これまで運転がかなりいいかげんだったという話がありますが――

森 要するに、グラスノスチ（情報公開）やペレストロイカをやらなければならなかったのは、ソ連全体の経営や運転がいいかげんだったからでしょう。現にチェルノブイルだって、あれだけの事故を起こしていても、三号炉は一時間近く運転していた。隣のやつがバカなことをやってやる。おれたちには関係ないよ。あしたからメーデーの休みに入るから」といった調子で。ですから、私に言わせれば、マン・マシン・インターフェースだとか舌をかむようなこ

とを言うから、みんな誤解するんです。「あれは、マン・マシン・インターフェースの問題じゃない」とソ連自身が言っています。要するにソ連の経済運営と同じように、原子力発電所の運転もメチャクチャなことをやっていたのが、チェルノブイルに集中的に出ただけのこと。

――それを科学者がむずかしく言えば、マン・マシン・インターフェースという表現になる――

森 この事故から日本が真剣に教訓をくみとる努力をすること、これは大切なことです。しかし、これを「人間と機械の問題だ」などと説明するから間違った印象を与えているような気がする。一般の人は「マン・マシン・インターフェースか。東京で大会議が開かれたそうだ。六つの規則違反があったとか規則違反といえば、私も今日、駐車違反したし、ほかにもした。六つ規則違反すると世界中に放射能が飛び散る。原子力ってそんなに怖いものか。やめた方がいいな」となるわけでしょう。本当のマン・マシン・インターフェースの意味は、人間と機械との相互監視体制のことであり、このようにマン・マシン・インターフェースの考え方を、人間側が一方的にミスをおかすと簡単に事故につながるという誤解を与える所に問題があります。

――その辺は少し考えなければいけませんね。しかし、なぜ、アメリカ、ソ連と大国に事故が起こるのでしょうか――

森 なぜ、超大国だけで事故が起きているかといえば、超大国には一種のおごりがあります。ソ連もそうです。今までの仕組み通りにやれば、物事はうまくいくと思っていた。ノルマを決めて、監視を厳しくしてやらせれば出来るということをやってきたわけです。

アメリカは自由競争で、NRC（原子力規制委員



チェルノブイル4号炉(左)の前で訪ソ安全調査団のメンバー

会)があつて、規則にあつていないかどうか、弁護士がらんでいるという状況だった。申請の条件さえ満たせば、だれでも原子力発電所を作れる。ところが日本は、ある意味では原子力に対して謙虚。原子力に合うやり方をいろいろ考えながらやってきた。そして、日本人の忠実な性格に仕組みがあつていて、わけですね。アメリカ人は、決まりきったことを毎日、コツコツやることを必ずしも好まないから、優秀な人は、宇宙など新しい方へチャレンジしてしまう。そうしたおごりが事故に結びついている。だから超大国で、事故が起きたから、普通の国でも事故が起きるとはいえない。それなりの恐れを持っています。四月三日、原産会議応接室でインタビュー…文責

編集部